

鳥栖市文化財調査報告書第69集

所熊山古墳群

2003

鳥栖市教育委員会

序

この報告書は、鳥栖市教育委員会が平成14年度と平成15年度にかけて実施した所熊山古墳群の発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、古墳が2基確認されました。うち1基は竪穴式の石室を持つもので鳥栖市では薄尾古墳群に次ぐ出土となります。鳥栖市内においても調査された例は少なく貴重な資料と言えます。

発掘調査の記録については本書に詳しいところですが、その内容が学術・文化の向上に幾分とも寄与し、併せて郷土の歴史と文化財について市民の皆様がご理解を深めていただく資料となれば幸いに存じます。

最後に発刊にあたり、ヤマモトキューソー株式会社及び興進建設をはじめとする関係各位並びに調査にあたりご指導いただきました諸先生方、発掘作業に従事していただきました地元の方々に対し厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

鳥栖市教育委員会

教育長 中尾 勇二

例 言

1. 本書は平成13年度から平成14年度にかけて発掘調査を行った鳥栖市西新町所在の所熊山古墳群の調査報告書である。
2. 発掘調査はヤマモトキューソー株式会社の委託を受けて、鳥栖市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び報告書作成作業にあたってはヤマモトキューソー株式会社、興進建設、株式会社 高尾設計事務所の協力を得た。
4. 本書の執筆、編集は湯浅満暢が担当した。
5. 発掘作業は下記の分担で行った。
表土除去作業：興進建設
空中写真撮影：有限会社空中写真企画
遺構・遺物写真撮影：湯浅満暢
遺構実測：杉岡俊昭、谷川久美子、榎藤イツヨ、(有)埋蔵文化財サポートシステム
発掘作業：岩橋良年、仁田利宣、久保山隆弘、榎藤義明、永松昭彦、龍頭啓一、陣内義美、野下浩代、杉岡俊昭、陣内三十三、松隈敏子、栗山満恵、宮地貞子
遺物整理：溝上直子、谷川久美子、榎藤イツヨ、松崎友子
遺物実測：榎藤由美子、毛利よし子
製 図：榎藤由美子、毛利よし子
6. 測定値の表示に用いた単位は遺構が m、遺物が cm である。
7. 遺跡の略号は ATG で佐賀県教育委員会の台帳に登録した。
8. 遺構の略号は ST：古墳 SD：溝 である。また、遺構番号は 2 桁で01、02、03とした。
9. 所熊山古墳群の発掘調査、報告書作成に際し、下記の方々から指導・ご助言をいただいた。
小田富士雄（福岡大学）
武末 純一（福岡大学）
蒲原 宏行（佐賀県立博物館）
中尾 修二（浜玉町教育委員会）
白木原 宜（佐賀県文化課）

報告書抄録

ふりがな	ところくまやまこふんぐん							
書名	所熊山古墳群							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鳥栖市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第69集							
編著者名	湯浅満暢							
編集機関	鳥栖市教育委員会							
所在地	〒841-8511 佐賀県鳥栖市宿町1118番地 TEL 0942 (85) 3695							
発行年月日	西暦2003年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ところくまやまこふんぐん 所熊山古墳群	さがけん 佐賀県 とすし 鳥栖市 にしじんまち 西新町	410213	—	33° 21' 13"	130° 28' 43"	020225 ~ 020430	2,000m ²	駐車場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
所熊山古墳群	古墳	古墳	古墳	須恵器、土師器、鉄器		竪穴式石室		

本文目次

第1章 調査の概要	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第3章 調査の内容	9
1. 遺跡の概要	9
2. ST01古墳の調査	13
3. ST02古墳の調査	20
4. SD03溝の調査	25
5. まとめ	25

挿図目次

図1 鳥栖市周辺地形図 (1/200,000)	5
図2 遺跡分布図 (1/30,000)	8
図3 調査区位置図 (1/2,500)	10
図4 調査前地形測量図 (1/500)	11
図5 調査後地形測量図 (1/400)	12
図6 ST01古墳墳丘測量図 (1/100)	14
図7 ST01古墳石室 (1/60)	15
図8 ST01古墳墳丘土層断面図① (1/60)	16
図9 ST01古墳墳丘土層断面図② (1/60)	16
図10 ST01古墳出土遺物実測図① (1/3)	17
図11 ST01古墳出土遺物実測図② (1/3)	17
図12 ST01古墳出土遺物実測図③ (1/3)	18
図13 ST01古墳出土遺物実測図④ (1/3)	19
図14 ST01古墳出土遺物実測図⑤ (1/2)	19
図15 ST02古墳墳丘 (1/100)	21
図16 ST02古墳石室 (1/40)	22
図17 ST02古墳墳丘土層断面図① (1/40)	23
図18 ST02古墳墳丘土層断面図② (1/40)	23

図19	SD03溝実測図	24
図20	出土遺物実測図	25

表 目 次

表 1	周辺遺跡一覧表	7
表 2	竪穴式石室一覧表	27
表 3	出土遺物一覧表	28

写真図版目次

図版 1	1. 調査区全景東から	2. 調査区全景	3. ST01古墳東から
	4. ST01古墳全景	5. ST02古墳南から	6. ST02古墳全景
図版 2	1. ST01古墳石室南から	2. ST01古墳石室西から	3. ST01古墳石室北から
	4. ST01古墳土層断面	5. ST01古墳墳丘出土状況	6. ST01古墳出土状況
	7. ST01古墳出土状況	8. ST01古墳出土状況	
図版 3	1. ST01古墳墳丘除去後	2. ST02古墳作業状況	3. ST02古墳調査前西から
	4. ST02古墳調査前南から	5. ST02古墳石室西から	6. ST02古墳石室北から
	7. ST02古墳石室		
図版 4	1. ST02古墳石室床面付近	2. ST02古墳石材除去後西から	3. SD03溝東から
	4. SD03溝出土状況	5～8. ST01古墳出土遺物	
図版 5	1～18. ST01古墳出土遺物		
図版 6	1～7. ST01古墳出土遺物		

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経過

平成2年6月14日付けで鳥栖市西新町字所熊1402-6他に所在する埋蔵文化財の有無について照会がなされた。土地の所有者である㈱アサヒコーポレーションが貸倉庫建設を計画したため、開発面積は約20,000m²である。当時、対象地は遺跡として周知されていなかったが、以前より地元では塚と呼ばれ古墳の存在が知られており、また山頂付近には中世山城である所熊山城があることから見直しが必要な地区ではあった。そのため貸倉庫建設予定地約20,000m²について確認調査を実施することとなった。平成2年7月16日～21日の期間でバックホーによる確認調査を実施した。その結果、新たに2基の古墳が確認された。その他の地域では若干の土器片が出土したものの遺構については確認されなかった。対象地については平成2年8月22日付鳥教委社第80-12号で確認調査結果報告を提出し、所熊山古墳群として周知化を図った。確認調査で新たに見つかった2基を含む計3基の古墳については設計変更が行われない限り本調査が必要であると判断した。

確認調査の結果をもとに工事主体者である㈱アサヒコーポレーションと協議を重ねた結果、設計変更が行われることになり全ての古墳が緑地として保存されることとなった。また、将来的な新たな開発行為に対処するために鳥栖市教育委員会と㈱アサヒコーポレーションの間で「埋蔵文化財の取扱いに関する覚書」を平成2年9月28日付けで締結した。

平成13年12月に新たに開発の計画が持ち上がり、平成13年12月26日付けで確認調査依頼と埋蔵文化財発掘届がヤマモトキューソー株式会社より提出された。対象地は平成2年度に建設された倉庫の隣接地であった。新たな計画では所熊山の東斜面を掘削し、駐車場の造成を行うというものであった。この計画では平成2年度に緑地として保存された古墳3基のうち2基が対象地に含まれることになっており早急な対応が迫られた。㈱アサヒコーポレーションとヤマモトキューソー株式会社との間で土地の売買が行われたため、駐車場の造成のためには2基の古墳を掘削しなければならないことが予想された。

平成14年1月に現地確認のための踏査を行った。この時点ですでに伐採作業が開始されており、その際に誤って墳丘の一部が削られてしまっていた。これは、平成2年度に締結した「埋蔵文化財の取扱いに関する覚書」に関して申し送りが十分になされていなかったことや、作業開始時点で現場担当者に対して古墳の所在が明確に示されていなかったことが原因のようである。

踏査の結果を元に今回の工事主体者であるヤマモトキューソー株式会社と協議した結果、2基の古墳が掘削範囲に含まれることが判明した。さらに、工事計画の設計変更や工法変更による古墳の保存をについて協議を重ねたがいずれについても不可能であるとの結論に達し、本調査を実施することで合意した。

本調査の開始時期については予算執行上の問題もあり鳥栖市教育委員会としては平成15年4月を希望した。しかし、開発側の計画では5月末の工事の完成予定となっていた。これは工事対象地内を横切る水路を下流地域の田植え時期までに切り替える必要があるため、そのためには埋蔵文化財の本調査を遅くとも4月末までに終了する必要がある。本調査の期間としては2ヶ月程度が予想されたため遅くとも平成

14年2月には本調査に着手しなければならなかった。また、ヤマモトキューソー株式会社からも早急に本調査を開始するように要望があった。

それを受け、ヤマモトキューソー株式会社と再度協議を持ち、古墳2基を含む約2,000m²について本調査を実施することとなった。また、本調査から調査報告書作成までのスケジュールについては、現場における発掘調査作業を平成14年の4月末までに終了し、整理作業及び報告書作成作業を平成15年3月末までに終了することで合意した。調査費については市内緊急発掘調査受託費で対応することとした。

平成14年2月20日付けでヤマモトキューソー株式会社と「平成13年度所熊山古墳群埋蔵文化財調査委託契約書」を締結し、平成14年2月25日より現場での発掘作業を開始した。平成13年度末であったため3月30日でいったん現場作業を中断し、平成13年度分の実績報告書の提出を行った。平成14年度の本調査については4月5日付けで新たに「平成14年度所熊山古墳群埋蔵文化財調査委託契約書」を締結した。平成14年5月2日で現場での発掘作業を全て終了した。出土した遺物の水洗作業は4月15日以降現場作業と並行して藤木文化財整理室で行った。出土遺物の復元作業は発掘作業終了後の5月7日から開始した。記録整理作業並びに報告書作成作業は6月1日から平成15年2月28日までの期間で実施した。

2. 調査組織

調査主体 鳥栖市教育委員会

総括 中尾 勇二（教育長）

水田 孝則（教育部長）

木塚 輝嘉（教育部次長）

西川 和彦（生涯学習課長）

高尾 泰明（生涯学習課参事）

藤瀬 禎博（生涯学習課長補佐兼市史編纂係長）

石橋 新次（文化財係長）

調査 湯浅 満暢（文化財係主査 調査・報告書担当）

向田 雅彦（文化財係主査）

久山 高史 内野 武史 島 孝寿 大庭 敏男

調査協力 ヤマモトキューソー株式会社

興進建設

高尾設計事務所

第2章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

所熊山古墳群が所在する鳥栖市は佐賀県の東部に位置し、筑後川流域に展開する筑紫平野の一角を占める。北は筑紫山地によって限られ福岡県那珂川町と、南は筑後川をもって福岡県久留米市との境をなし、東北の三養基郡基山町、西の三養基郡中原町、北茂安町とは九千部山より派生する丘陵で接する。市域は東西に8.2km、南北に9.0km、面積は71.73km²で、人口は61,318人（平成14年12月1日現在）である。

地勢は、脊振山系の九千部山（847.5m）を主峰として三つの支嶺が派生し、それぞれから南東あるいは南に延びる丘陵を経て平坦部となり筑後川にいたる。地形を東から詳述すると、権現山から杓子ヶ峰に連なる第一の支嶺は南東の柚比・今町の高位段丘に通じ曾根崎の低位段丘におよぶ。第二の支嶺は、九千部山の南側から起こり城山・群石山に終わる。最も西に位置する第三の支嶺は、九千部山の西南側から石谷山・雲尾峠・笛吹山を経て、北茂安町千栗一帯まで連なる丘陵となる。それぞれの支嶺に源を発した河川は、山麓で扇状地を形成し平野部を南下して筑後川に注ぐ。主な河川として第一、第二の支嶺間を流れる大木川、第二の支嶺の南で四阿屋川と合流して南流する安良川、第三の支嶺の北側に石谷山を水源とする沼川が挙げられる。大木川は山麓に神辺扇状地を形成し、その左岸には杓子ヶ峰から延びる高～低位段丘、右岸には現市街地が載る標高15～25mの低位段丘がある。安良川は山麓で養父扇状地をつくる。安良川と沼川の間には標高15～80mの低～高位の洪積段丘があり、朝日山によって北の麓地区、南の旭地区に分けられる。河川はいずれも南流し筑後川へ注ぐが、下流域は標高10m以下の沖積低地の広大な平坦部となっており、穀倉地帯であるとともに古くは何度となく水害にみまわれる常襲地帯であった。

また、鳥栖市域は古代以降の律令制下において筑前・筑後・肥前三国の接する地域であり、大宰府・筑後国府・肥前国府を連絡するそれぞれの官道（城の山道・筑後路・肥前路）が通過し、近世になり長崎街道が整備されると、轟木・田代に宿場が置かれ栄えるとともに久留米道・彦山道が分岐する地点でもあった。明治以降鉄道や国道あるいは現代において高速道路が整備されると、ここが分岐点となり重要な交通の要衝となるとともに、流通の拠点ともなっている。

2. 歴史的環境

鳥栖市内には数多くの遺跡が所在する。その分布は、脊振山系山麓一帯にベルト状に分布する古墳時代後期の群集墳を除けば、市北東部の「柚比遺跡群」と称される柚比町・今町周辺の丘陵群、市南西部の江島町周辺の丘陵群、および養父扇状地から現市街地の載る低位段丘の一帯の3つのグループに分けられる。

旧石器時代では、長ノ原遺跡・本川原遺跡・平原遺跡・牛原原田遺跡・本行遺跡でナイフ形石器や細石器類が採集されているが、遺構は検出されておらず詳細は明らかでない。

縄文時代になると、早期では西田遺跡で多量の押型紋土器・無紋土器・条痕紋土器に伴い多くの集石遺

構を検出している。前期では牛原前田遺跡から曾畑式土器が出土している。中期では平原遺跡で集石遺構とともに並木式土器が出土し、岸田南遺跡からは阿高式土器が出土している。後期では蔵上遺跡から土器棺墓・住居跡を検出した。晩期では本川原遺跡・平原遺跡・永吉遺跡・蔵上遺跡などを挙げるができる。

弥生時代では前期の様子は明らかではなく、遺跡数が急増するのは前期末以降のことである。北東部の柚比遺跡群では八ツ並金丸遺跡・今町共同山遺跡・今町岸田遺跡・長ノ原遺跡などで集落跡や墓地跡が確認されている。中期では、平原遺跡・安永田遺跡・前田遺跡などで集落が形成され、安永田遺跡では銅鐸・銅矛の鋳型とともに青銅器鋳造関連の遺物や遺構が確認されており、拠点的な集落であった。平原遺跡では丘陵上に環濠集落を検出している。また柚比本村遺跡・柚比梅坂遺跡・大久保遺跡・八ツ並金丸遺跡・安永田遺跡・フケ遺跡などに墓地が造営されている。特に、柚比本村遺跡では赤漆玉鈿装鞘銅剣を含む7本の銅剣を副葬する首長墓とともに、祖霊祭祀とみられる大型建物跡や祭祀土坑を検出している。一方、市南西部の調査例は少なく不明な点もあるが、江島町周辺に広がる丘陵上に立地する本行遺跡で大溝で丘陵を分けた中期中頃から後期中頃を中心とする集落跡が検出されている。また、青銅製品とともに銅剣・銅矛などの鋳型類が多数出土しており、このあたり一帯の拠点的な集落であったことが明らかとなり、安永田遺跡とともに同時期同規模の集落の存在が明らかとなった。

後期になると丘陵部には遺跡がほとんど見られなくなり、現在の市街地や低位段丘上に集落が形成される。本原遺跡・牛原原田遺跡・内精遺跡などが挙げられ、特に内精遺跡では大規模な集落跡が検出されている。また、京町遺跡・藤木遺跡などの市街地でも調査が行なわれ、環濠や集落の一部を確認している。

古墳時代前期になると赤坂前方後方墳や本川原遺跡・下原遺跡・今泉遺跡・日岸田遺跡で方形周溝墓がみられる。5世紀になると平原古墳・山浦古墳群・薄尾古墳群・田代東方古墳等をみるができるが、集落遺跡は現在まで確認されていない。しかし6世紀にはいり、遺跡は急増する。大木川左岸の中位段丘上に剣塚古墳・東田古墳・岡寺古墳・庚申堂塚古墳などの前方後円墳や田代太田古墳・ヒャーガンサン古墳などの彩色系装飾古墳が築造され、安良川流域には前方後円墳の牛原前田5号墳や稲塚古墳・塩塚古墳などの円墳が築造される。また、6世紀後半～7世紀代に脊振山系の山麓部を中心に多数の群集墳が築かれる。集落跡は、元古賀遺跡・蔵上遺跡・内精遺跡・梅坂炭化米遺跡などで確認されている。

飛鳥～平安時代には肥前国に属し、大木川を境として北東部を基肄郡、南西部を養父郡の範囲とした。『肥前風土記』によると、基肄郡は「郷陸（六）所、里十七」とあり、養父郡は「郷肆（四）所、里十二」とある。基肄郡衙の位置は現在のところ不明であるが、八ツ並金丸遺跡で大型掘立柱建物跡が瓦とともに検出されており、その関連がうかがわれる。養父郡衙は、現在の蔵上町集落に所在したと考えられていたが、それを裏付けるように蔵上遺跡から掘立柱建物の倉庫群が検出されるとともに、「厨番」と記した墨書土器なども出土している。集落跡は、基肄郡域では八ツ並金丸遺跡・今町岸田遺跡・本川原遺跡・本原遺跡から、養父郡域では牛原前田遺跡・立石惣楽遺跡・柳の元遺跡・蔵上遺跡などで確認されている。

律令体制が衰退する平安時代後期以降、鳥栖地域においても荘園が形成されるようになり、13世紀末には荘園は基肄・養父両郡の約半数の耕地を占める。この大部分は大宰府天満宮安楽寺領で、あとは宇佐八幡宮弥勒寺領となっているが、実質的にこれらの荘園は、曾禰崎氏・土々呂木氏・藤木氏などの御家人地



图1 鳥栖市周辺地形図 (1/200,000)

頭によって支配された。

南北朝時代から戦国時代にかけての戦乱期には、支配者の頻繁な交替がみられるが、この時期、村田町や牛原町周辺には山城が築かれるようになる。明応6年（1497）に筑紫氏が鳥栖地域を押さえて以降、天正14年（1587）に島津氏に攻略されるまでの約90年間、勝尾城を本城に多くの支城群が構成され、山麓には武家屋敷や町屋など城下町も形成された。山浦新町遺跡ではこの時期の城下町の遺構が検出され、その具体像が解明されつつある。また、その前段階の集落跡が京町遺跡で確認され、当時の鳥栖市域における筑紫氏との関わりの中でみられる中世集落の変遷の一端をみることができる。

近世以降、基肄郡と養父郡の東半分は対馬藩領に、養父郡西半分は佐賀鍋島藩領となる。また長崎街道が整備されるとともに、両藩領域にはそれぞれ田代宿・轟木宿が設けられた。また、轟木宿には番所が置かれ、田代宿には対馬藩肥前田代領（1万6千余石）の統治機関として代官所が設置された。

明治時代の廃藩置県当初、鍋島藩領は佐賀県、対馬藩田代領は巖原県に分かれていたが、伊万里県、三潴県、長崎県を経て明治16年に佐賀県となった。昭和29年には、鳥栖町・田代町・基里村・麓村・旭村の2町3村が合併し鳥栖市が誕生した。



図2 遺跡分布図 (1/30,000)

表1 周辺遺跡名

1	所熊山古墳群	24	一の坪古墳群	47	蔵上遺跡
2	所熊山城跡	25	一の坪条里跡	48	内精遺跡
3	村田古墳群	26	乗目遺跡	49	大楠遺跡
4	朝日山城跡	27	薄尾遺跡	50	外精遺跡
5	朝日山古墳群	28	平田原遺跡	51	四本松遺跡
6	安良遺跡	29	山都町古墳群	52	牛原原田遺跡
7	幸津遺跡	30	四ノ坪遺跡	53	花の木遺跡
8	儀徳遺跡	31	山浦西北方古墳群	54	元古賀遺跡
9	三本松遺跡	32	西田遺跡	55	平町遺跡
10	相模遺跡	33	本村遺跡	56	古賀遺跡
11	江島遺跡	34	麓遺跡	57	布津原遺跡
12	西谷古墳群	35	原古賀遺跡	58	門戸口遺跡
13	狂言谷遺跡	36	五本谷遺跡	59	浅井遺跡
14	本行遺跡	37	山浦古墳群	60	藪原遺跡
15	於保ヶ里遺跡	38	大町前遺跡	61	鎗田遺跡
16	不動島遺跡	39	中ノ原古墳群	62	天神木遺跡
17	柳の元遺跡	40	葛籠城跡	63	原口遺跡
18	惣楽遺跡	41	山浦新町遺跡	64	町上遺跡
19	野副遺跡	42	牛原前田遺跡	65	西浦遺跡
20	立石遺跡	43	養父岸田遺跡	66	内畑遺跡
21	一本杉遺跡	44	下岸田遺跡	67	今泉遺跡
22	立石古墳群	45	伝壬生邸跡	68	真木遺跡
23	一の坪遺跡	46	養父遺跡		

第3章 調査の内容

1. 調査の概要

所熊山古墳群は鳥栖市の西部、鳥栖市西新町字所熊に所在する。古墳群の立地する所熊山は古生代に形成され地層は結晶片岩を主とする。この結晶片岩は朝日山から所熊山一帯にのみ認められる。古墳群は所熊山の南東斜面上に点在している。

周辺地域の遺跡の分布状況は、所熊山古墳群と隣接する所熊山頂上付近には所熊山城跡が所在している。沼川をはさんで東方には村田古墳群が所在し、さらに東には朝日山古墳群、安良遺跡が隣接する。国道34号線南方の丘陵上には相模遺跡、江島遺跡が連続して所在する。所熊山古墳群は従来から地元では「塚」と呼ばれ古墳の存在が知られていた。しかしながら所熊山古墳群として周知化されたのは平成2年である。そのため、それ以前に行われた所熊山の開墾や造成などの開発時に古墳群を含む多くの遺構が破壊されたようである。しかしながら、所熊山山頂周辺の中世山城関連遺構と所熊山古墳群の一部が破壊を免れている。

所熊山古墳群の所在する所熊山には中世の所熊山城関連の遺構が確認されている。所熊山は朝日山から西へ約1.4kmに位置する。所熊山城関連の遺構は頂上部から尾根沿いに確認されており、主郭は標高113.5mの頂上付近で、長方形の削平地が確認されている。そこから南へ向かって階段状の張り出しが見られ一部に石積みが確認されている。頂上部のやや東側からは径2.5~3.0mほどの台形状の土盛が認められており烽火台の可能性が考えられる。

今回の調査対象地区は所熊山東斜面の雑木林で、西側隣接地は昭和56年以前にグラウンド造成が行われており、周辺地区を含んだ広範囲にわたり地形が改変されている。その際の記録については不明であり、調査が行なわれていない。

今回は現存する3基の古墳のうち2基について本調査を実施した。残りの1基については造成対象地内であったが、設計変更が可能であったためこれまでどおり緑地として保存されることとなった。古墳は標高21m~31mの所熊山東斜面の尾根筋に位置する。二つの古墳の距離は約45mであり、ほぼ東西に並ぶ。調査区西端の斜面頂上付近に位置する古墳をST01古墳、斜面中腹のものをST02古墳とした。ST02古墳の西側で確認された溝状遺構をSD03溝と遺構番号を付し調査を行った。

今回の駐車場造成予定面積は約15,000m²で、うち調査対象面積は2,000m²であった。そのため調査に支障のない部分については調査と並行して造成工事を行なうこととした。造成工事は発掘作業への安全面の考慮及び調査への影響を考慮して、調査対象地区北側の開発予定地北端から開始することとなった。調査については工事工程との関係から斜面頂上部のST01古墳から着手した。

また、古墳墳丘以外の部分については平成2年度の確認調査では遺構が検出されなかったものの、万全を期すために調査区全域をバックホーにより表土剥ぎを行い、その後人力による遺構検出を行なった。その結果、ST02古墳の西側から溝状の遺構を確認した。所熊山東斜面の傾斜が緩やかになった部分で東に向かって平坦面が延びる部分で、その先端にST02古墳が位置する。

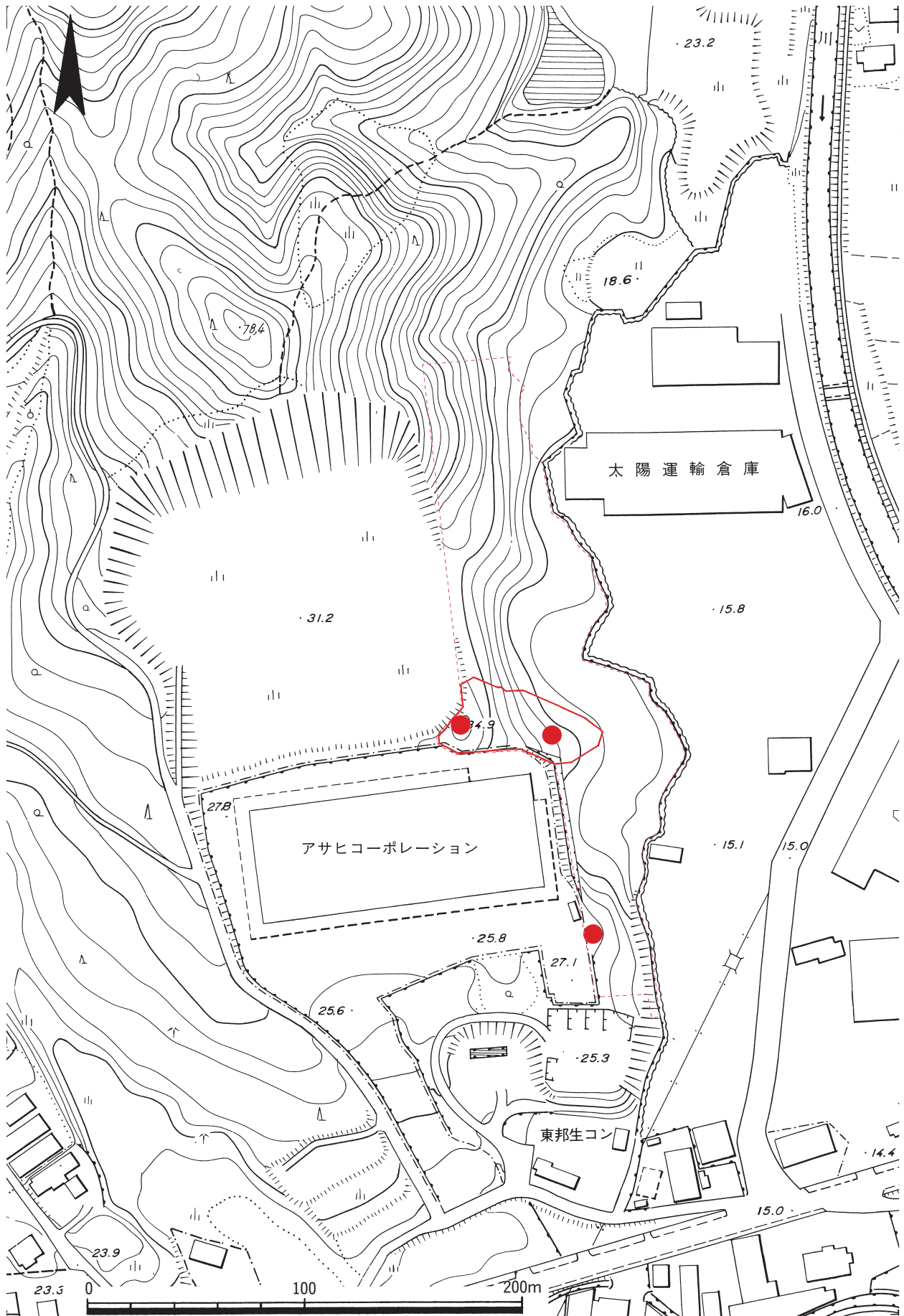


図3 調査区位置図 (1/2,500)

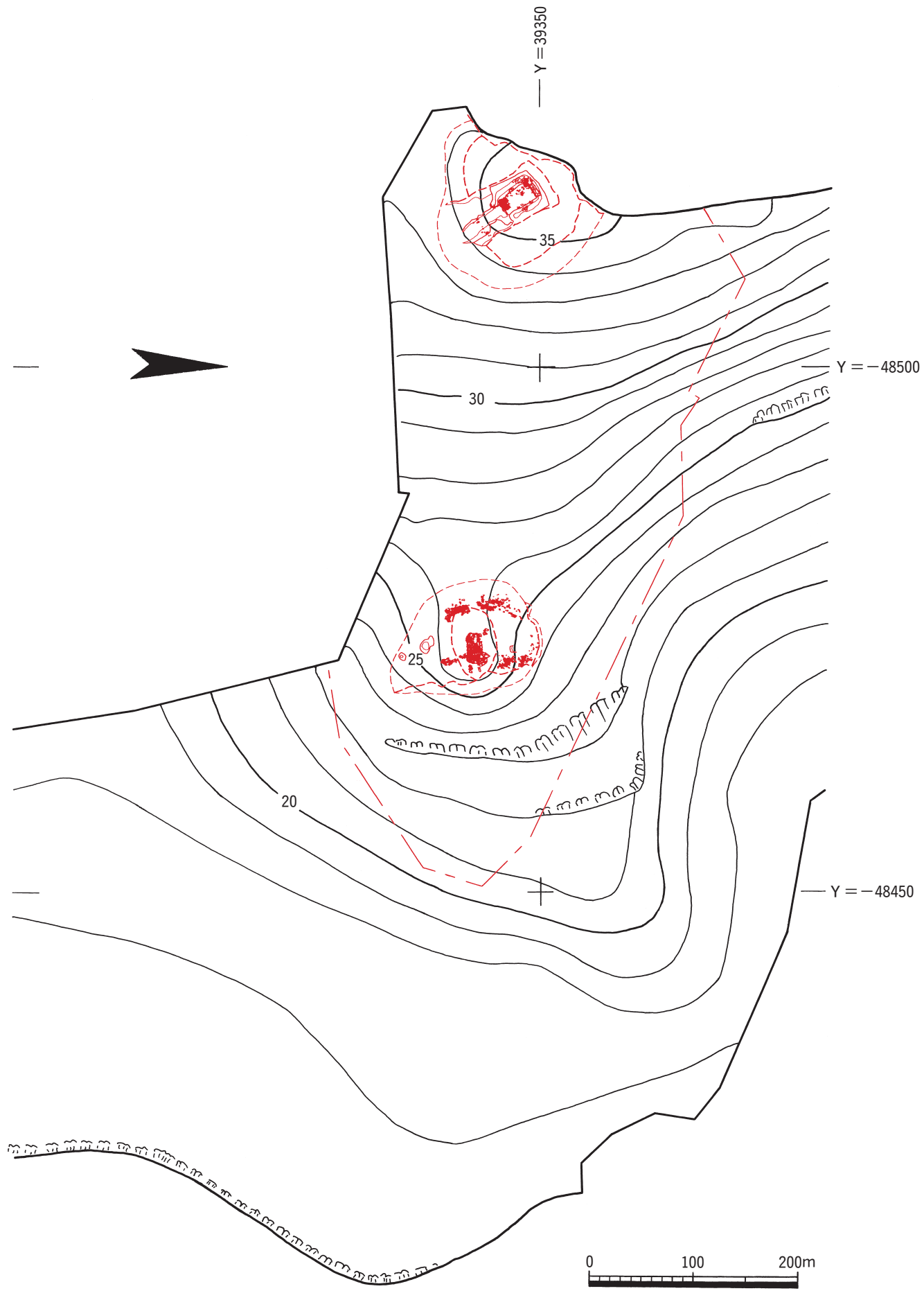


图4 调查前地形测量图 (1/500)

Y = 39330

Y = 39350

Y = 39370

+ Y = -48520

+ Y = -48500

+ Y = -48480

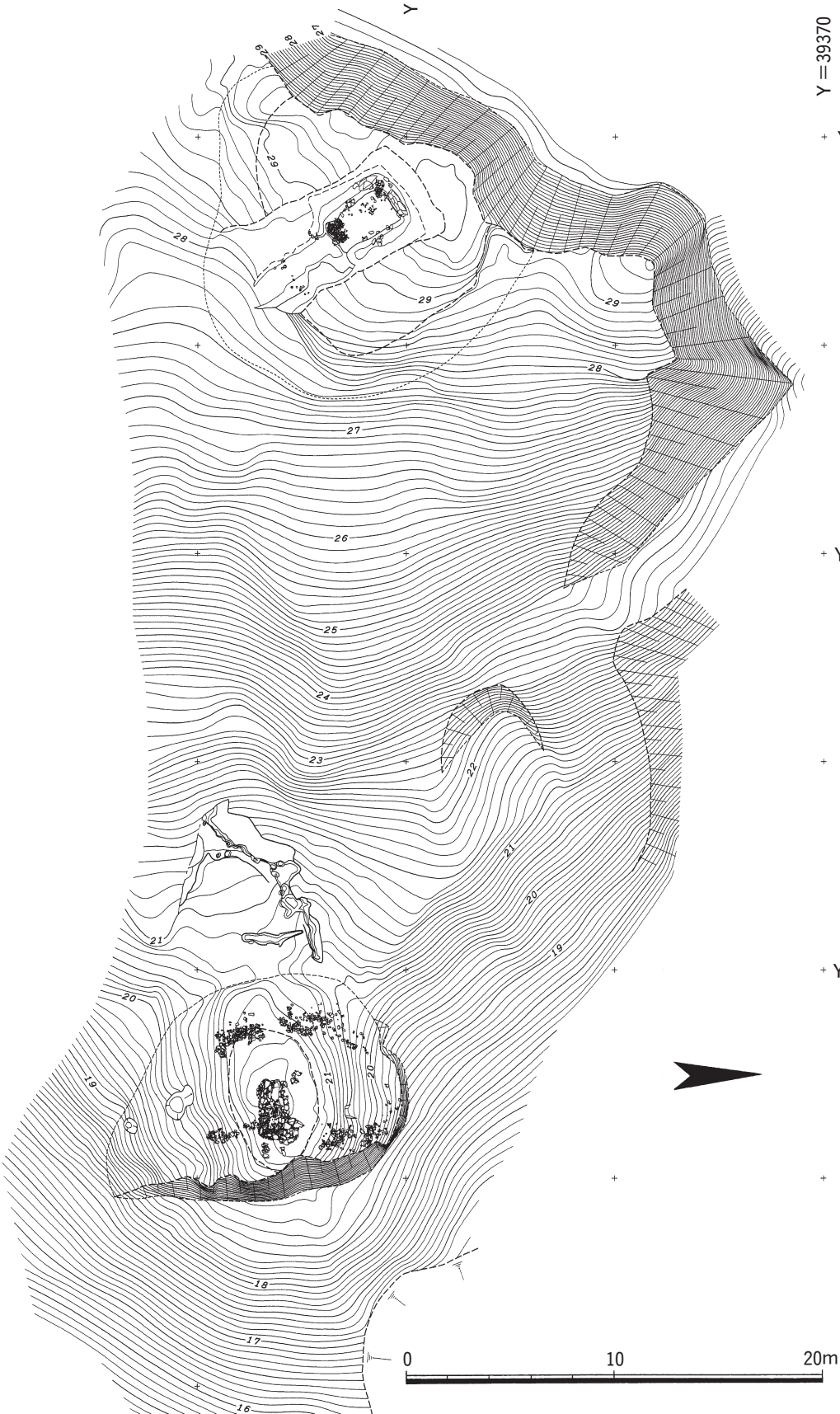


図5 調査後地形測量図 (1/400)

バックホーによる表土除去作業及び廃土の処理については造成工事担当の興進建設より全面協力を頂いた。また、高尾設計事務所からは調査前地形図等を提供していただいた。ここに感謝の意を表したい。

2. ST01古墳の調査

ST01古墳は調査区の西端に位置し、墳丘の一部が西側調査区外にかかる。調査区外の部分については隣接地の造成の際に破壊されてしまったようである。調査時の改変された地形では明確ではないが、本来ST01古墳は東にのびる尾根のテラス上の部分に構築されたと考えられる。また、本調査前の伐採の段階では墳丘頂上部がわずかに窪んでいることが確認された。この段階では天上石の欠落、若しくは墳丘頂上部が若干の削平を受けているものの比較的残存状態の良い古墳と考えられた。

調査は最初に、古墳の墳丘を除く全域をバックホーにより表土剥ぎを行なった。墳丘については人力により、現墳丘面全域の腐食土と木根等を取り除くことから始めた。腐食土除去後に墳丘全面の精査を行なった。その結果、墳丘頂上部が大きく掘削されていることが確認された。また、石室上部構造についてもすでに破壊され石材もほとんどが欠失していることがわかった。残存した石材も原位置を保つものは無かった。当初の予想とは違い残像状態が非常に悪いことが判明した。引き続き墳丘上部を掘り下げ検出したところ、石室のプランを確認することができた。石室内は赤白色土で埋まっていた。墳丘の土が流れ込んだものとは違い、明らかに人為的に埋め戻されている状況であった。羨道部分の上層も同じ土が堆積していた。あらためてST01古墳の周囲を検出したところ、羨道部の前面で重機のキャタピラ痕跡を確認することができた。隣接地の開発時に破壊を受けた可能性が高い。周溝については確認されなかった。

墳丘盛土が完全に現れたところで、作業はまず石室内の土を取り除くことにした。石室内の掘り下げと同時に羨道部分についても並行して掘り下げていった。その結果、石室部分は床面まで赤白色土で埋まっており、遺物は全く出土しなかった。石材もほとんどが抜き取られており、天井石等の石室内への落ち込みも無かった。石室入り口付近で1石が出土したが原位置でないことが明らかであった。写真のみで実測図では省略した。羨道部分では須恵器、土師器が多くはないがまとまって出土した。

次に石室の中心に基準杭を設定し実測図の作成をおこなった。引き続き墳丘の形状、規模、構造を把握するために北、東、西方向にトレンチを設定し掘り下げ土層図を作成した。石室の実測及び土層図実測が完了後墳丘測量を実施してST01古墳の調査を終了した。

ST01古墳は単室両袖型の横穴式石室で、主軸をN-33°-Wにとり南東方向に開口する。墳丘径は推定ではあるが約17mの円墳と考えられる。墳丘上部は削平され盛土は墳丘基底面から高さ約50~90cmほど残存する。石室構築に先行して標高30m付近で地山整形を行い、平坦な墳丘基底面を作りだしている。玄室の中央長は3.5m、中央幅は1.8mの長方形プランを呈する。奥壁に1.5m×0.8m×0.5mの1石が残存する。左側壁には小石材が若干残る。敷石は一部残存するのみで10cm未満の小礫を敷き詰めていたようである。出土した遺物については図10の1~4が墳丘盛土内から出土した。古墳築造の時期を押さえる資料と言える。図11の5~18は羨道部の中ほどから出土した。床面に近いところからの出土である。図12も羨道部からの出土であるが埋土中、または石室掘削後の攪乱土からの出土である。

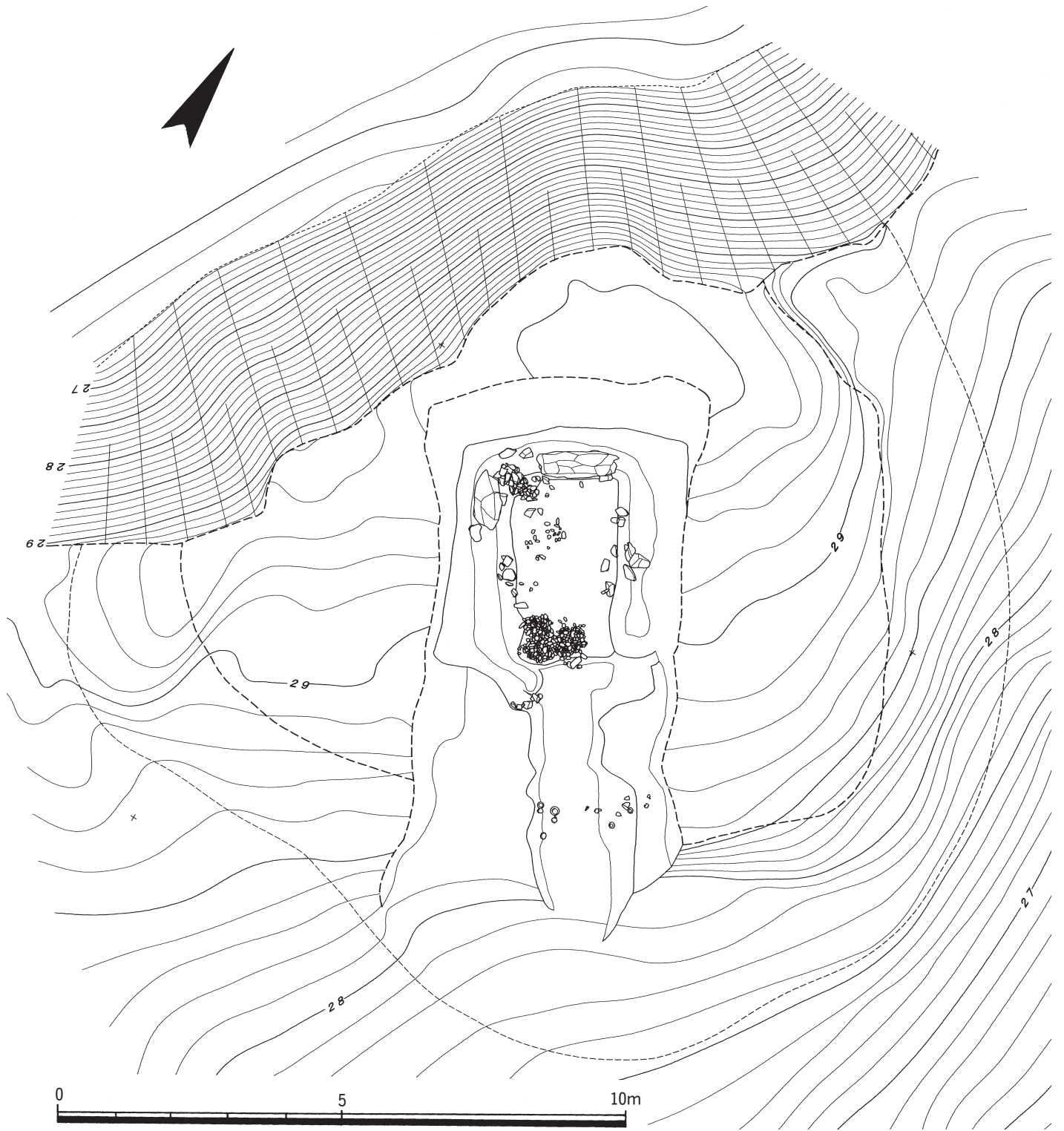


图6 ST01古墳墳丘測量図 (1/100)

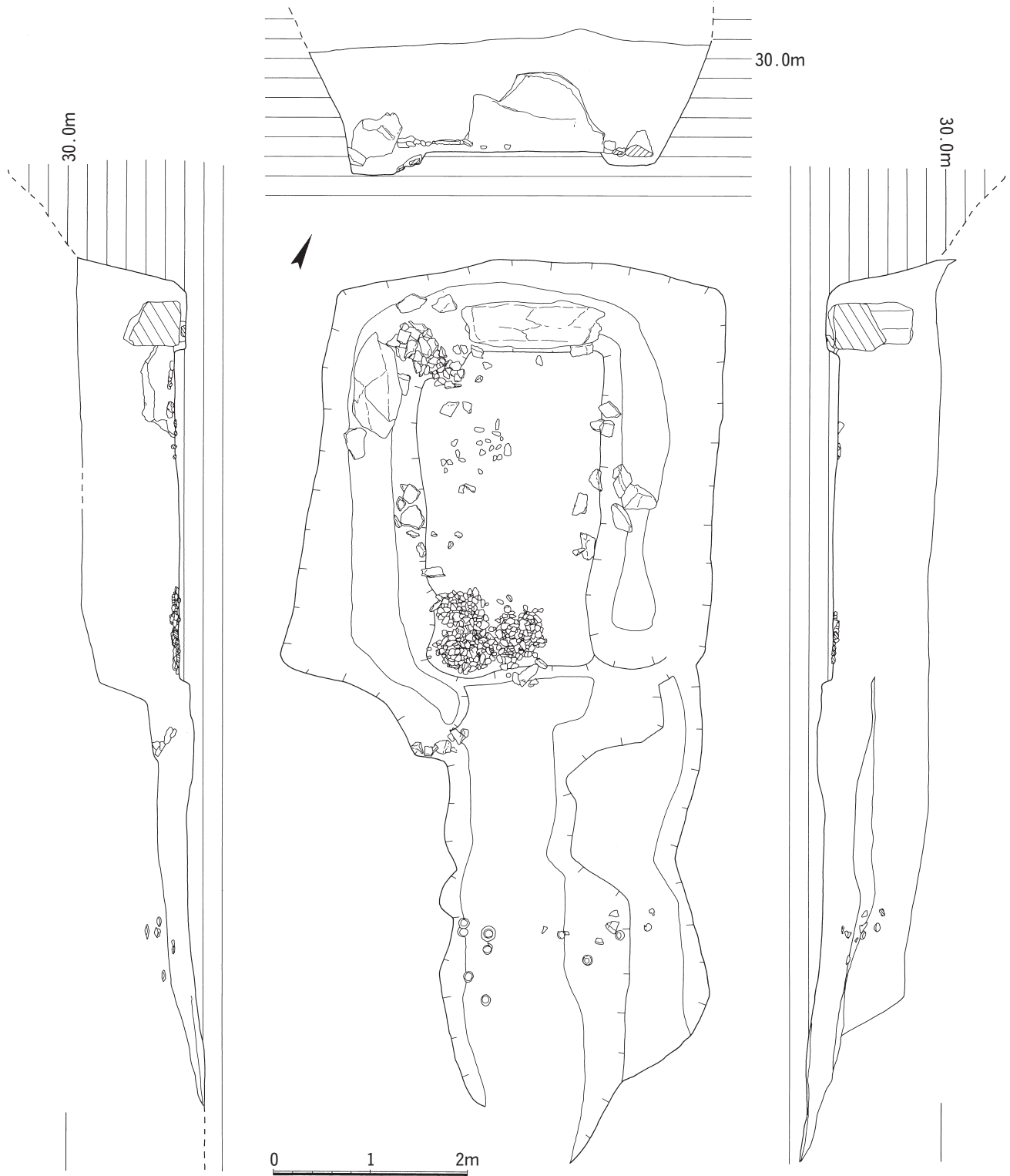


图7 ST01古墳石室 (1/60)

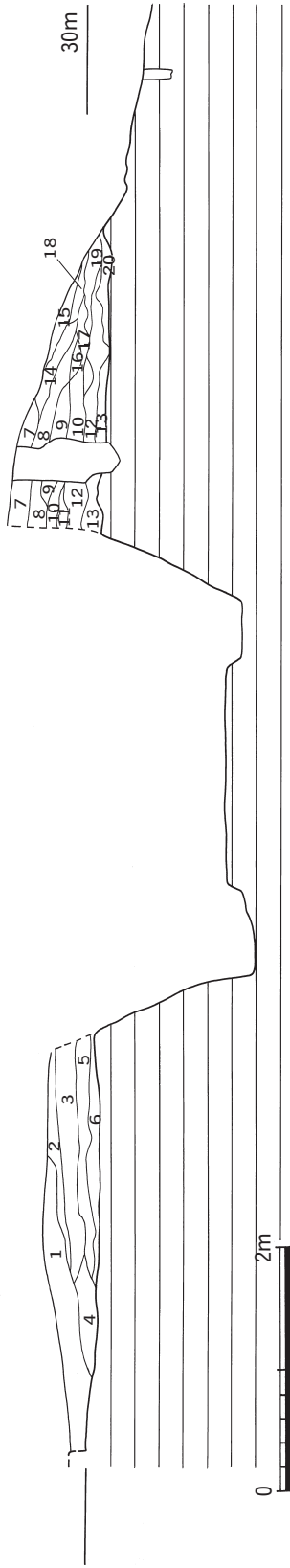


図8 ST01古墳墳丘土層断面図① (1/60)

- 図8
1. 灰褐色土
 2. 灰褐色土 (明白土かブロック状に含まれる)
 3. 褐色土 (砂粒含む)
 4. 赤白色土
 5. 褐色土 (砂粒含む、明白土混じる)
 6. 褐色土 (5層より粘質)
 7. 赤白色土 (砂粒含む)
 8. 褐色土 (礫含む)
 9. 赤白色土 (礫含む)
 10. 赤橙色土
 11. 赤橙色土
 12. 赤褐色土
 13. 赤褐色土
 14. 褐色土 (礫含む)
 15. 褐色土 (礫含む)
 16. 褐色土 (礫含む)
 17. 赤褐色土 (やや粘質)
 18. 褐色土
 19. 褐色土
 20. 赤褐色土

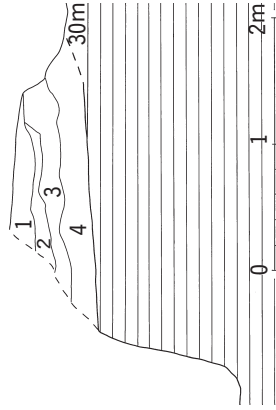


図9 ST01古墳墳丘土層断面図② (1/60)

- 図9
1. 褐色土 (砂粒含む)
 2. 赤白土 (砂粒やや含む)
 3. 褐色土 (やや粘質)
 4. 黒白色土

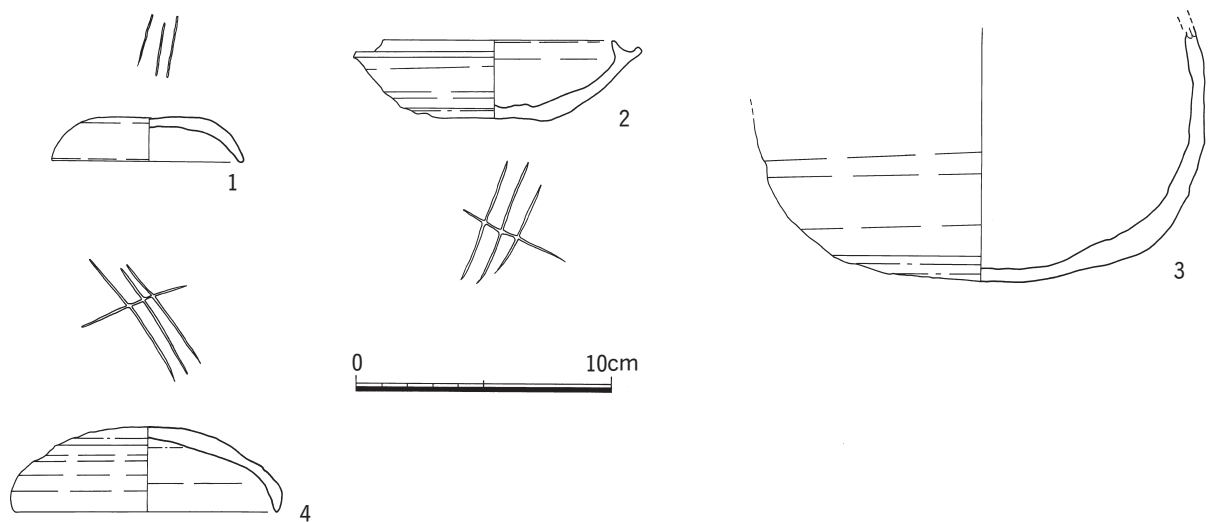


图10 ST01古墳出土遺物実測図① (1/3)

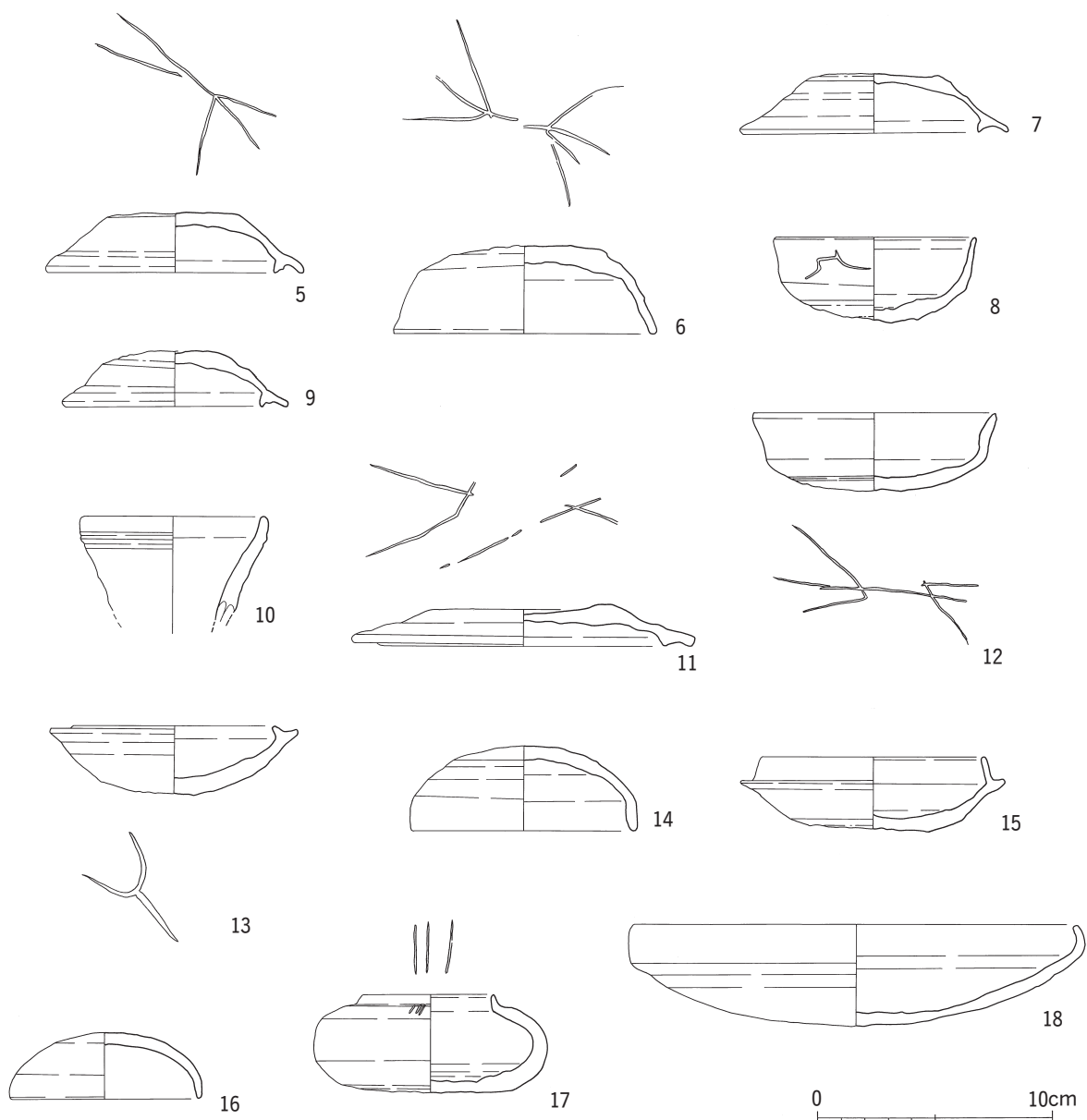


图11 ST01古墳出土遺物実測図② (1/3)

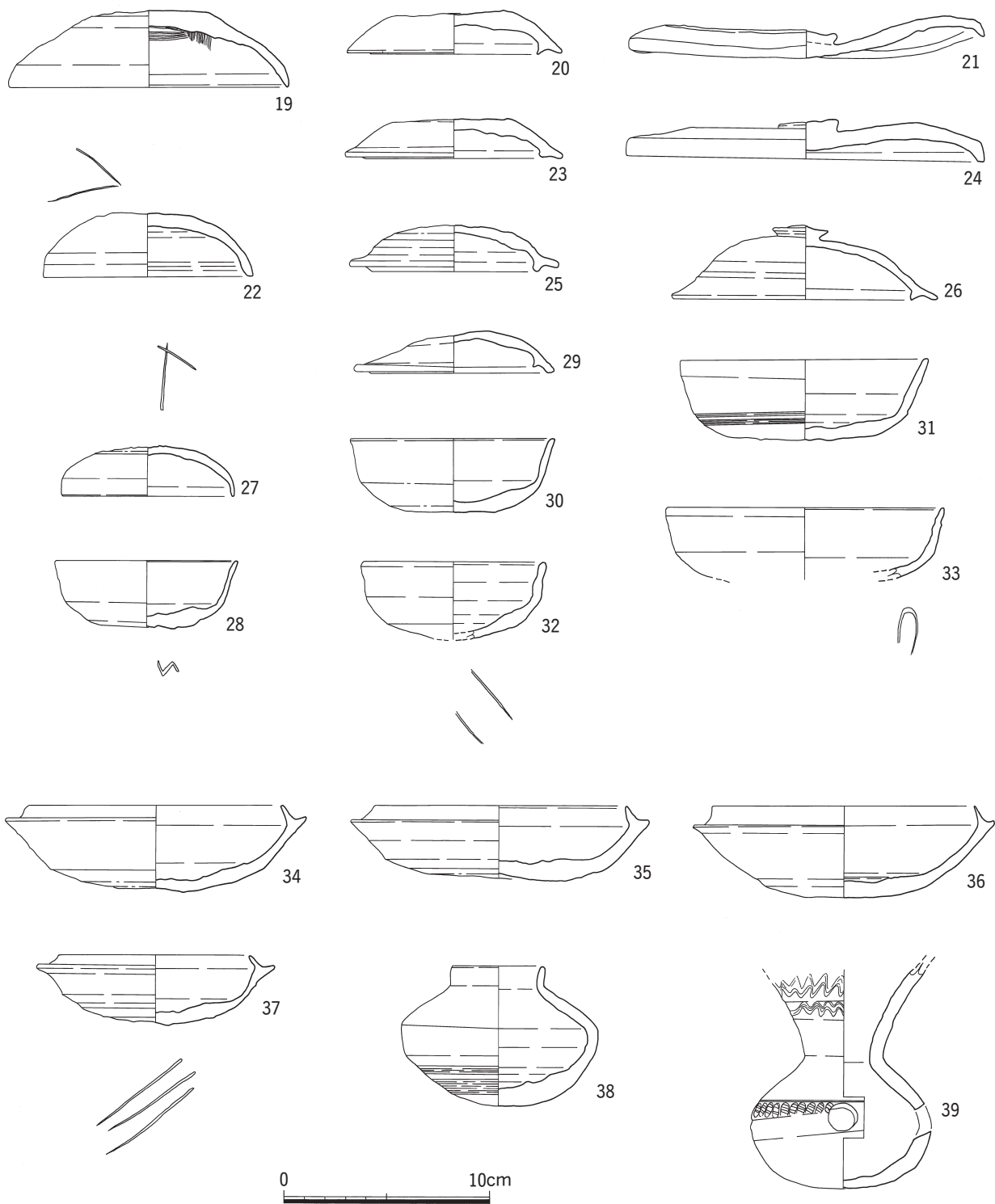


图12 ST01古墳出土遺物実測図③ (1/3)

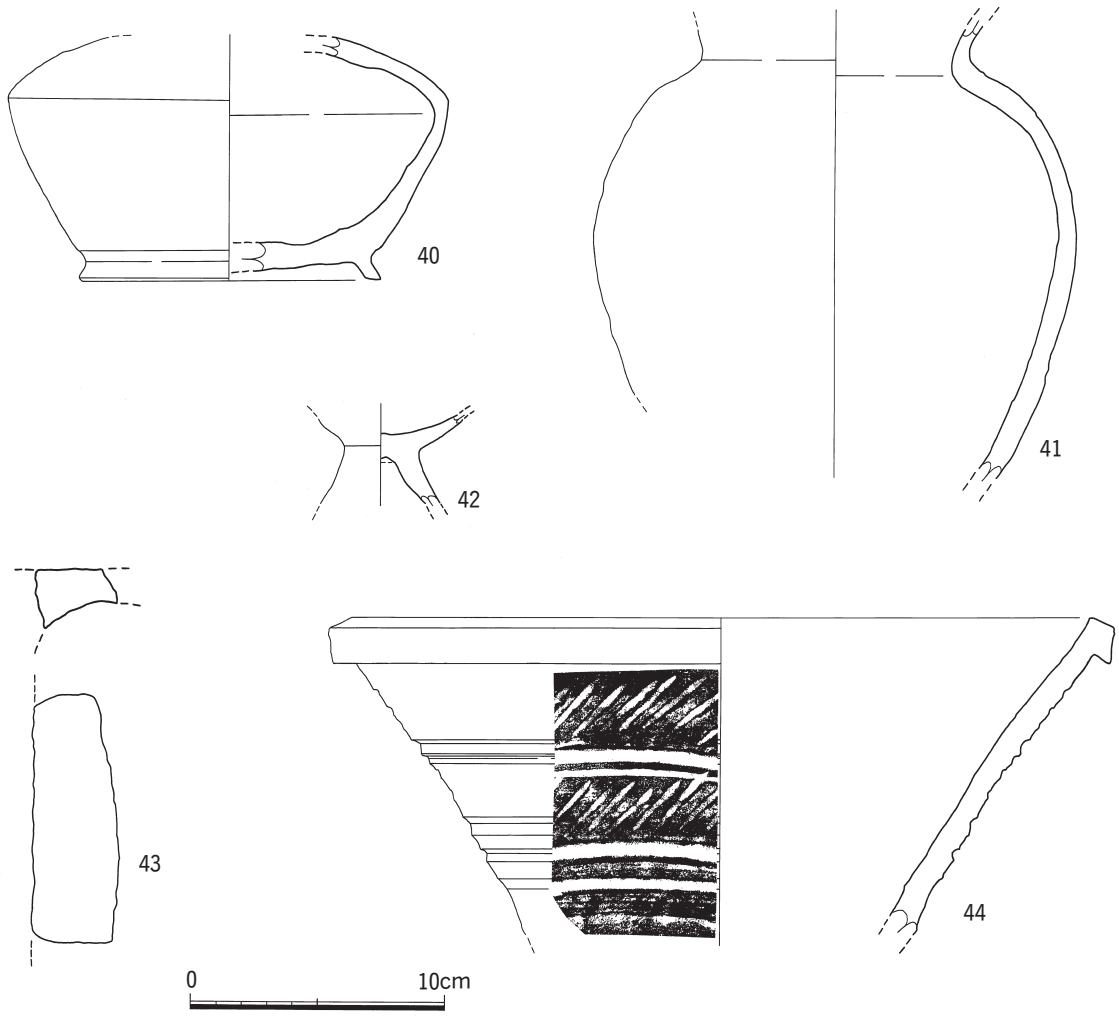


图13 ST01古墳出土遺物実測図④ (1/3)

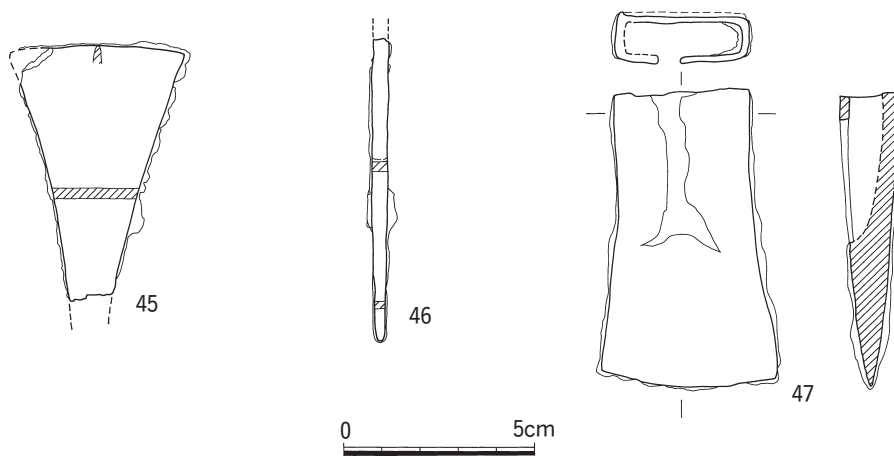


图14 ST01古墳出土遺物実測図⑤ (1/2)

鉄器は45、46、47の3点が出土した。いずれも羨道部からの出土で図11の土器類といっしょに出土した。鉄鍬45は斧箭式、銚先が平らに近い。46は鉄鍬の頸部であろう。47は鉄斧で袋部を有する。全長7.9cm、刃部4.6cm、袋部内径は3.0×0.9cmの隅丸の長方形である。

築造～使用時期はおよそ6世紀末から7世紀初めか。

3. ST02古墳の調査

ST02古墳は調査区のほぼ中央で、東斜面中ほどの尾根上に位置する。主軸をN-89°-Eにとる。標高は約21mである。竪穴式石室で墳丘径は14m前後と推測される。調査開始前の伐採の時点で墳丘の東側部分が誤って削られてしまった。土層断面図で墳丘東端の裾部が垂直気味に落ちるのはそのためである。墳丘上部は欠失しており葺石の一部と思われる石材が露出していた。

当初はこの一部露出した石材を葺石と考えていたために残存状態が良好な古墳と推測し調査にとりかかった。また、墳丘南側にわずかな窪みが確認されたことから南方向に開口する横穴式石室と考え調査を進めた。作業は古墳築造当時の墳丘面を明らかにするため、ST01古墳と同様に現墳丘面全体の腐食土や木根を取り除くことから開始した。

続いて古墳の開口部分を確認するために墳丘の南北にトレンチを設定し掘り下げた。その結果、当初開口部と推定していた墳丘南側の窪みはそうではないことが判明した。その部分は地山であり木根の伐採跡のようであった。また、墳丘の上部で盛土が見られた。次に東西にトレンチを設定し掘り下げると同時に頂上部の検出を行なった。検出の結果、墳丘頂上部のほぼ中心付近に結晶片岩の板石がまとまって出土した。調査開始時点では葺石と考えていた石材が石室の一部であることが判明した。さらに精査した結果長さ2.0m、最大幅0.5m、最小幅0.3mの石室を確認することができた。検出時点ではその規模から箱式石棺の可能性も考えたが、板石を水平に積んだ状況から竪穴式石室と断定した。

石室は主軸をほぼ東西に取る。天上石は欠失しており石室内には土砂が流れ込んでいた。天上石については一部の石材が残存していた可能性もあるが墳丘頂上部の検出時に誤って廃棄してしまったようである。また、石室南壁の東半分は石積が乱れており、板石数点が石室の外側に向かって掻き出されたような状態で見つかったことから、石室は人為的に壊されたと考えられる。盗掘された跡であろう。

石室の幅は東側が西側に比べやや幅広となることから被葬者は頭を東に向けていたと思われる。石室内の土砂を掘り下げ、竹根を取り除いたところ、深さ10cmほどのところから土が朱色に変化した。四方の壁面にも朱色が付着しており石室内にはベンガラが塗布されていたことが判明した。床面については明確でないが、石室内の土の堆積状況からおおよそ石室上部から20cm程度のところと考えられる。床面はほとんど水平である。石室内に木棺は残存しておらず、床面にも木棺の痕跡は確認できなかった。一般的には床に木棺を乗せる為の粘土を敷くが、それも確認できなかった。

ST02古墳からは墳丘、石室のいずれからも遺物は出土しなかった。石室内の堆積土についても持ち帰りふるいにかけたが遺物は出土しなかった。

石室西側のトレンチをさらに延長し掘り下げたところ、石室から西へ2.5mほどのところで葺石を検出

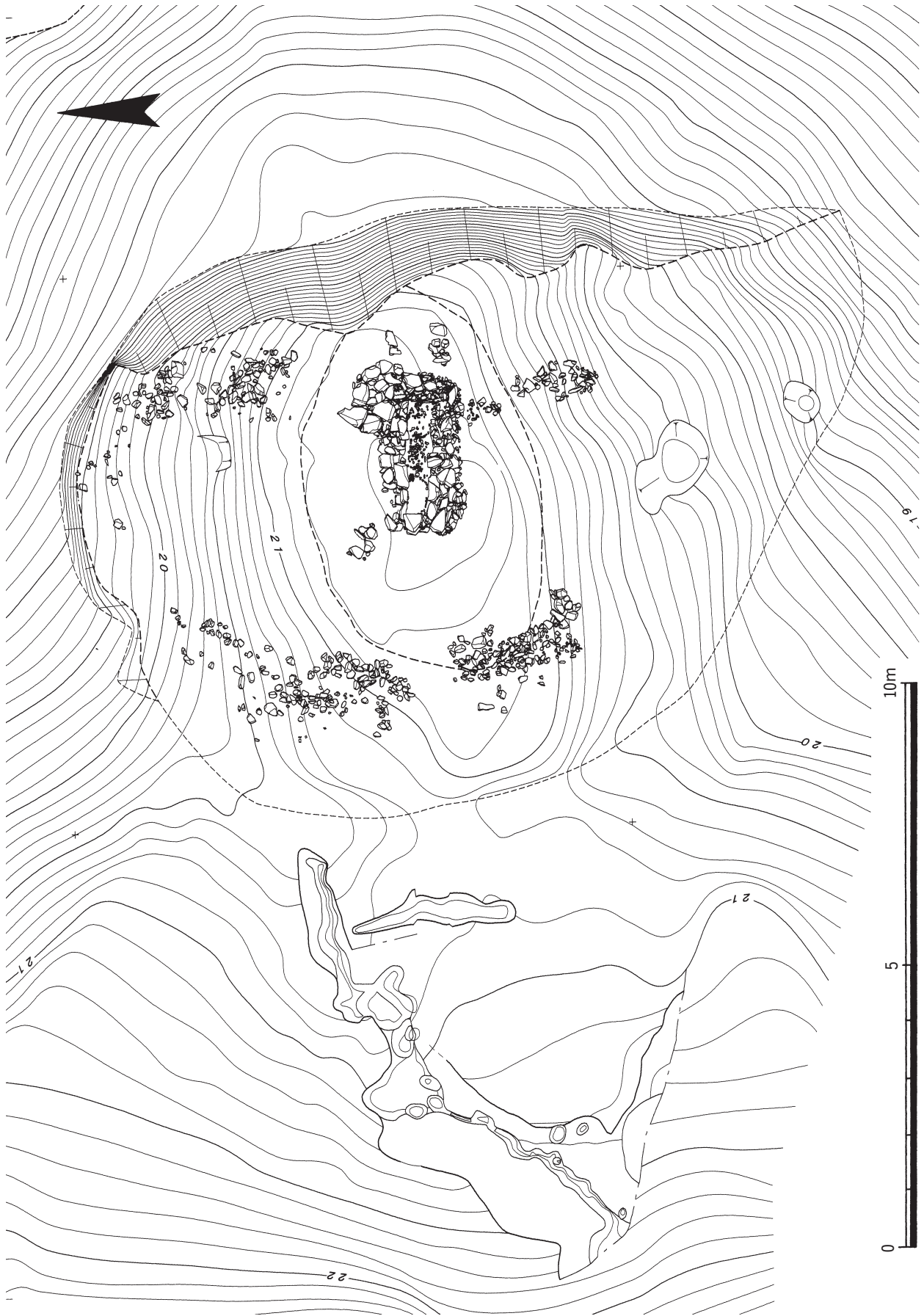


图15 ST02古墳墳丘 (1/100)

+

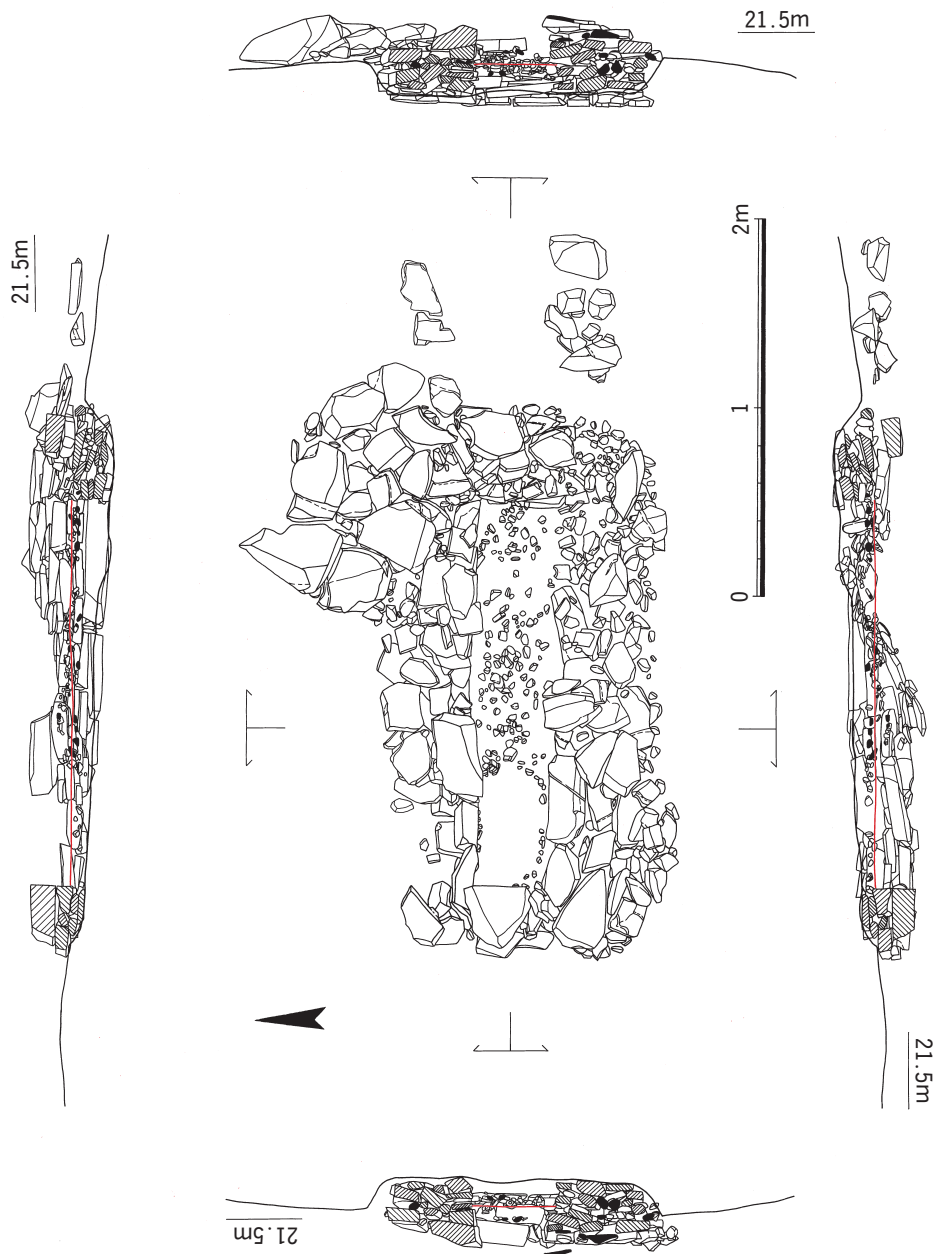


图16 ST02古墳石室 (1/40)

+

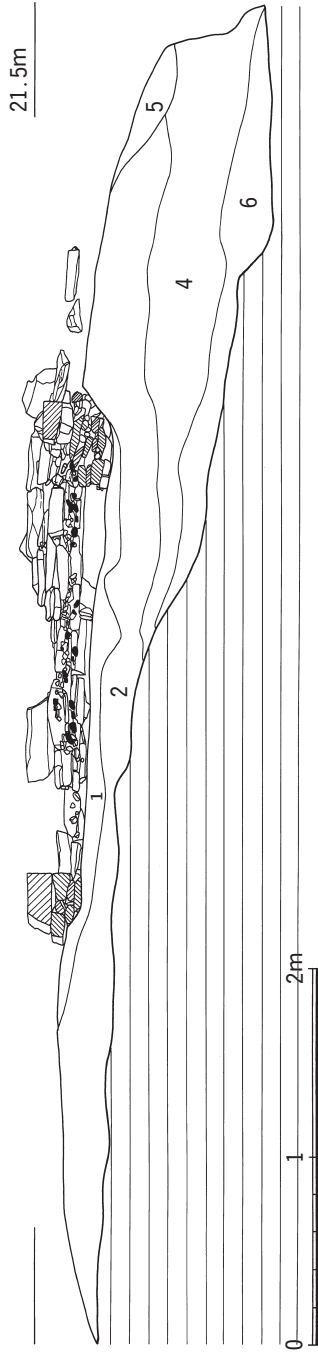


図17 ST02古墳墳丘土層断面図① (1/40)

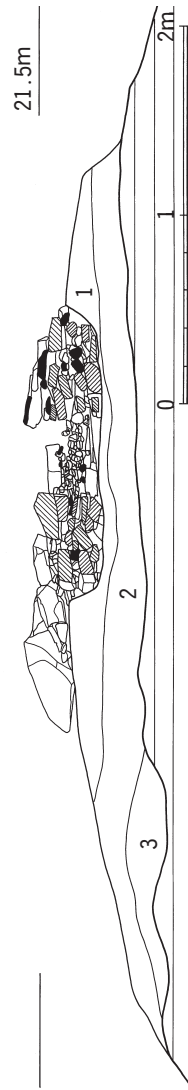


図18 ST02古墳墳丘土層断面図② (1/40)

図17・18

- 1. 黄褐色土 (やや砂質)
- 2. 赤黄褐色土
- 3. 黄灰褐色土 (礫少し含む)
- 4. 黄灰色土 (赤褐色土ブロック、小礫含む)
- 5. 黒褐色土
- 6. 赤褐色土 (やや粘質)

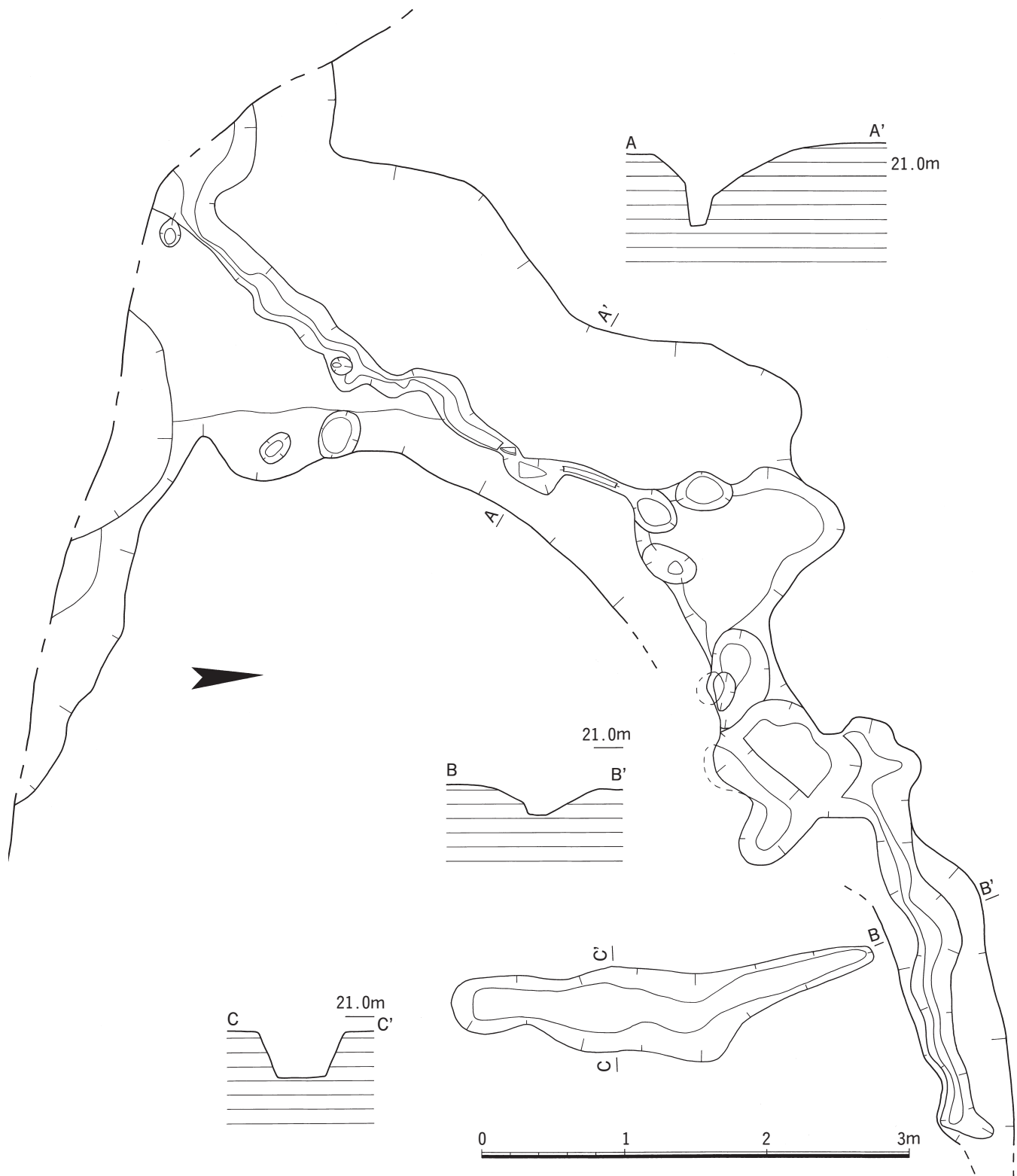


図19 SD03溝実測図 (1/40)

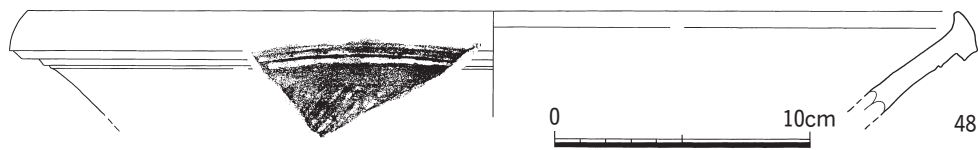


図20 SD03溝出土遺物実測図 (1/2)

した。葺石は幅1m、長さ2.5mほどの長方形の範囲にまとまっており、墳丘西裾部を南北に横切り弧を描くように円礫が残存していた。墳丘北斜面にも葺石を確認したが、結晶片岩の板石状のものも見られたことから、本来は頂上部に葺かれていたものが転落したと考えられるものもあった。葺石は墳丘全体を巡っていた可能性がたかい。

ST02古墳の調査で、調査開始直後の墳丘頂上付近の腐食土、木根の取り除きや表土掘り下げの段階で元位置にあったと思われる石室の石材や葺石の一部を誤って廃棄してしまったことは残念である。

4. SD03溝の調査

ST02古墳の西側に位置する。ST02古墳周辺の検出時に攪乱の痕跡が見られたため、ST02古墳の西トレンチを延長した。その結果、浅い溝状の遺構を確認した。溝を確認したのは傾斜が緩やかになり、ST02古墳に向かい平坦になる部分で、溝の幅は約0.6～2.1mである。断面形は、溝の両端から緩やかに下り中央部分はU字型である。中央部分の深さは0.06m～0.3mである。溝の全長は約9mほどを確認した。溝の北東端の幅は約0.5mで次第に浅くなり消滅している。ST02古墳の墳丘裾部から南西方向へ延びる。その先は調査区外にかかるため全容は不明である。ST02古墳の墓道の可能性も考えられる。須恵器の甕の口縁部破片が1点のみ出土した。

5. まとめ

ここでは鳥栖市内における過去の竪穴式石室の調査事例について紹介し、あわせて佐賀県内で報告された竪穴式石室の一覧を挙げてまとめとしたい。

今回の調査ではST02古墳の内部主体が竪穴式石室であることが判明した。鳥栖市内での調査例は少なく過去の出土例では、1955年（昭和30年）に調査された薄尾古墳群（鳥栖市原古賀町）で確認されているのみである。ただし、1970年（昭和45年）に調査された山浦古墳群（鳥栖市山浦町）10基のうち3基が内部主体に箱式石棺を持つ古墳として報告されており、それらの内部構造及び規模はST02古墳の竪穴式石室に類似している。これら三つの古墳群は鳥栖市の西部に位置し、北東から山浦古墳群、薄尾古墳群、所熊山古墳群の順で等間隔でほぼ一直線に並んでいる。

薄尾古墳群、山浦古墳群の内部主体からは未盗掘でありながら土器類の出土が見られない。所熊山古墳群のST02古墳についても石室内及び古墳周辺から、土器の小破片すらも出土していない。調査時点では石室の一部が破壊されていたこともあり、盗掘により遺物が持ち去られたと推測していたが、薄尾古墳群と山浦古墳群同様に副葬されていなかった可能性も高い。すなわち山浦古墳群から薄尾古墳群、所熊山古墳群を含めた比較的近いこの地域の特徴と考えられるかもしれない。

薄尾古墳群は所熊山古墳群から北東に約1.2km 離れており、山浦古墳群と所熊山古墳群のほぼ中間に位置する。昭和24年頃には20数基の古墳が存在したと推定される。薄尾古墳群で確認された多くは竪穴式石室であり、箱式石棺も確認されている。『鳥栖史談2』（松尾禎作氏）には5基の古墳が報告されており、未盗掘の割合が多かったことも報告されている。なお、薄尾古墳群は昭和29年以降の鳥栖市営農場建設工事により破壊されている。完形の仿製方格規矩鏡1点（現在所在不明）が古墳の崩壊土より採取されている。詳細は不明であるが古墳は小形竪穴式石室であったと考えられる。箱式石棺からは変形獣文鏡（仿製）や勾玉・管玉・鉄剣等が出土している。

山浦古墳群は県営住宅建設に伴い調査が行なわれた。古墳は南東方向へ延びる丘陵上に築造され、10基の古墳が報告されており、うち3基が箱式石棺を主体部に持つ。山浦古墳群からは玉類の装身具のみが出土している。これら山浦古墳群で確認された箱式石棺の内部主体にはいずれも石材として緑泥片岩が使われており、扁平な板石を横に積み重ねていく小口積みで構築されている。なお、報告書では箱式石棺とあるが規模や構造的には所熊山古墳群出土のST02古墳と酷似しているためここに紹介した。

これら古墳の内部主体の規模と構造は類似性が認められるものの、築造及び副葬に伴う遺物が出土していないため詳細な時期検討は困難であるが、構造の特徴からおよそ5世紀代中頃であろうか。

所熊山古墳群 ST02古墳の内部主体は箱式石棺の特徴を有した竪穴式石室、または箱式石棺が竪穴式石室の影響を受けたというべきであろうか。

最後に佐賀県内の竪穴式石室について出土例をまとめてみた。

参考文献

- 『都谷遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 1991 佐賀県教育委員会
- 『黒谷・水呑古墳群』北部丘陵文化財発掘調査報告書第(1) 1993 佐賀県教育委員会
- 『免ヶ平古墳』史跡川部・高森古墳群保存修理事業報告書 1991 大分県立宇佐風土記の丘歴史資料館
- 『史跡谷口古墳保存修理事業報告書』 1991 浜玉町教育委員会
- 『仙道古墳』発掘調査及び保存修理事業報告書 2001 三輪町教育委員会
- 『長ノ原遺跡・神山古墳』鳥栖市文化財調査報告書第63集 2001 鳥栖市教育委員会
- 『永田古墳群』鳥栖市文化財調査報告書第66集 2001 鳥栖市教育委員会
- 『鳥栖・久留米地方の中世山城 雑感』樋口一成『栖』3号 1983 鳥栖郷土研究会
- 『経塚山古墳』浜玉町文化財調査報告書第1集 1980 浜玉町教育委員会
- 『椏島山遺跡調査報告書』佐賀県立博物館調査研究書(第3集) 1977 佐賀県立博物館
- 『姫方遺跡』一三養基郡中原町一 佐賀県文化財調査報告書第30集 1974 佐賀県教育委員会
- 『七夕池遺跡群』粕屋郡志免町所在の墓地群調査報告会資料 1974 福岡県教育委員会・志免町教育委員会
- 『今村清川町遺跡』北九州市文化財調査報告書第95集 2002 北九州市教育委員会
- 『国立歴史民俗博物館研究報告第56集』1994
- 『末盧国』1982 唐津湾周辺遺跡調査委員会
- 『佐賀縣史跡名勝天然記念物調査報告』1976 佐賀県・佐賀県教育委員会
- 『佐賀県の遺跡』1964 佐賀県文化財調査報告書第13集
- 『山浦古墳群』1973 佐賀県文化財調査報告書第21集
- 『薄尾古墳群について』松尾貞作『鳥栖史談2』1958

表2 竪穴式石室一覧

古墳名	石室規模(長×幅×高)m	所在地	備考
薄尾古墳群		鳥栖市原古賀町大字二本松	1955年調査、消滅
山浦古墳群(第6号墳)	$1.86 \times \frac{0.74}{0.64} \times 0.64$	鳥栖市山浦町大字	1970年調査 (箱式石棺)
〃 (第7号墳)	$1.76 \times \frac{0.56}{0.3} \times 0.5$	〃	(箱式石棺)
〃 (第9号墳)	$1.7 \times \frac{0.6}{0.4} \times 0.56$	〃	(箱式石棺)
志波屋開拓団地古墳	$2.50 \times 1.0 \times 1.0$	神崎郡神埼町大字志波屋字三本松	消滅
男女山古墳群 (男女神社西南古墳)		佐賀郡大和町大字久留間字男女山	
高島古墳		佐賀郡大和町大字梅野字都渡城	1922年調査、消滅
※射の場古墳	$1.9 \times \frac{0.45}{0.34} \times 0.56$	佐賀市金立町大字金立	1960年土取りにより遺跡消滅 佐賀県遺跡地図から削除されている。
西野古墳群		小城郡三日月町大字織島字東分	1895年調査(?)
コウザン山古墳群		小城郡小城町大字寺浦	
経塚山古墳	$4.9 \times \frac{0.95}{0.85} \times 0.8$	東松浦郡浜玉町大字淵ノ上字荷石	1979年調査
谷口古墳	$2.94 \times 1.58 \times 2.11$	東松浦郡浜玉町大字谷口	1939年調査
杉殿古墳		唐津市大字半田字金竹	1957年
下戸古墳	$2.2 \times 0.9 \times 0.9$	唐津市大字佐志字下戸	
惣原北古墳群(1号墳)		唐津市大字佐志字惣原	
惣原北古墳群(2号墳)		〃	
惣原北古墳群(4号墳)	$1.9 \times 0.6 \times 0.5$	〃	
惣原南古墳群(1号墳)		唐津市大字佐志字惣原	
女山古墳群(1号墳)	$2.0 \times 0.6 \times 0.8$	唐津市大字佐志字井尻	1939年調査
小長崎山古墳群(第2号墳)	$4.0 \times 1.0 \times 1.0$	唐津市大字柏崎字川頭	1956年調査
野崎古墳群(第1号墳)	$1.50 \times 0.75 \times 0.66$	藤津郡太良町大字大浦字野内	

表3 出土遺物一覧表

ST01古墳

図番号	番号	種類	器種	残存状況	法量			色調	焼成	形態・調整	ヘラ記号
					①口径	②器高	③底径				
図10	1	須恵器	杯蓋	完形	①7.5	②1.7		緑灰色	良好		有
図10	2	須恵器	杯蓋	完形	①10.3	②3.3		灰白色	普通	ヘラケズリ	有
図10	3	須恵器	杯身	完形	①9.0	②3.2		灰白色	良好	ヘラケズリ	有
図10	4	土師器	甕	口縁部欠損	②(10.0)			灰オリーブ色	普通	ヘラケズリ	
図11	5	須恵器	杯蓋	完形	①11.0	②2.5		青灰色	良好		有
図11	6	須恵器	杯蓋	完形	①11.2	②3.8		青灰色	良好		有
図11	7	須恵器	杯蓋	完形	①11.4	②2.5		青灰色	良好		
図11	8	須恵器	杯蓋	完形	①8.6	②3.6		灰色	良好	ヘラケズリ	有
図11	9	須恵器	杯蓋	完形	①9.7	②2.5		明赤褐色	やや良好	ヘラケズリ	有
図11	10	須恵器	壺	口縁部1/4残存	①(8.0)	②(4.4)		赤灰色	良好		
図11	11	須恵器	杯蓋	完形	①14.6	②1.8		青灰色	良好		有
図11	12	須恵器	杯蓋	口縁部1/5欠損	①10.4	②3.3		青灰色	良好		有
図11	13	須恵器	杯身	ほぼ完形	①8.5	②3.2		灰色	良好		有
図11	14	須恵器	杯蓋	口縁部1/3欠損	①9.6	②3.6		灰色	やや良好		
図11	15	須恵器	杯身	完形	①9.6	②3.3		オリーブ灰色	良好	ヘラケズリ	
図11	16	土師器	杯蓋	口縁部1/2欠損	①8.2	②2.8		黄橙色	良好		
図11	17	須恵器	壺	完形	①5.6	②4.3	③7.3	青灰色	良好		有
図11	18	土師器	杯身	口縁部1/6欠損	①19.4	②4.7		橙色	普通		
図12	19	須恵器	杯蓋	一部残存	①(13.6)	②3.7		灰色	良好	ヘラケズリ	
図12	20	須恵器	杯蓋	1/5欠損	①8.1	②2.2	③5.6	暗青灰色	良好		
図12	21	須恵器	杯蓋	1/2欠損	①17.4	②1.3		青灰色	良好	摘み有	
図12	22	須恵器	杯蓋	口縁部1/2欠損	①10.2	②3.2		にぶい黄橙色	良好		有
図12	23	須恵器	杯蓋	完形	①10.6	②1.9		にぶい黄橙色	良好		
図12	24	須恵器	杯蓋	1/2欠損	①17.3	②2.3		青灰色	良好	摘み有	
図12	25	土師器	杯蓋	1/4残存	①(8.1)	②2.2		にぶい黄橙色	普通		
図12	26	須恵器	杯蓋	一部残存	①(13.0)	②3.6		暗青灰色	良好	摘み有	
図12	27	須恵器	杯蓋	1/5欠損	①8.4	②2.5		暗灰色	良好	ヘラケズリ	有
図12	28	須恵器	杯身	完形	①8.3	②3.5	③3.4	暗青灰色	良好		
図12	29	須恵器	杯蓋	ほぼ完形	①9.6	②2.0		暗青灰色	良好		
図12	30	須恵器	杯身	1/4欠損	①9.9	②3.5	③4.2	灰色	良好		
図12	31	須恵器	杯身	口縁部1/4欠損	①12.0	②4.0	③7.0	灰色	良好		
図12	32	土師器	杯蓋	1/4残存	①(9.0)	②(3.8)		にぶい橙色	良好		有
図12	33	須恵器	杯蓋	1/3残存	①(13.6)	②(3.4)		青灰色	良好		有
図12	34	須恵器	杯身	1/3残存	①(12.3)	②4.2		灰色	良好		
図12	35	須恵器	杯身	1/4欠損	①12.3	②3.8	③6.5	青灰色	良好	ヘラケズリ	
図12	36	須恵器	杯身	底部残存	①12.6	②4.5	③4.5	青灰色	良好	ヘラケズリ	
図12	37	須恵器	杯身	ほぼ完形	①9.3	②3.7		灰色	良好	ヘラケズリ	有
図12	38	須恵器	壺	口縁部2/3欠損	①4.5	②6.7	③1.8	灰色	良好	ヘラケズリ	
図12	39	須恵器	ハソウ	1/3残存	②(10.7)			暗青灰色	良好		
図13	40	須恵器	平瓶	1/3欠損	②(9.6)	③11.8		暗青灰色	良好		
図13	41	須恵器	高杯	1/3残存	②(18.0)			青黒色	良好		
図13	42	土師器	高杯	底部残存	②(3.5)	③(4.5)		橙色	良好		
図13	43		瓦	一部残存	長(9.8)	幅(3.4)	厚1.6	にぶい橙色	良好		
図13	44	須恵器	壺	口縁部一部残存	①(30.0)	②(13.3)		灰白色	良好		

SD03溝

図18	48	須恵器	甕	口縁部一部残存	①(38.0)	②(4.1)		暗灰色	良好		
-----	----	-----	---	---------	---------	--------	--	-----	----	--	--

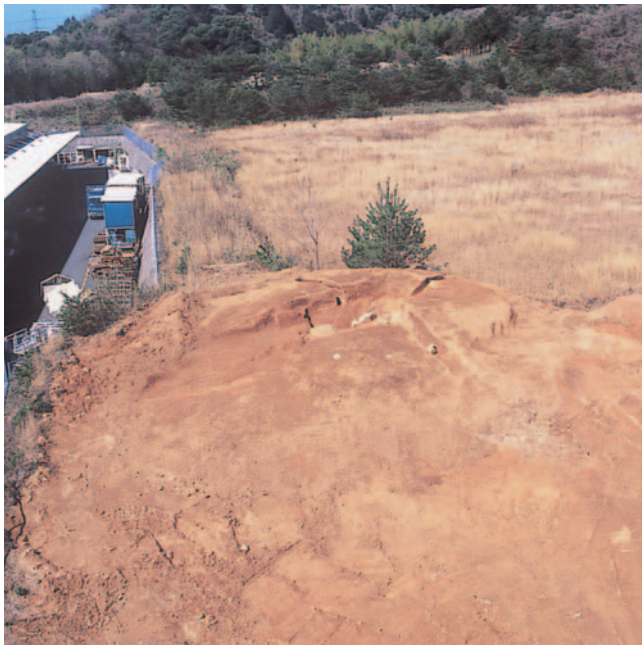
写 真 图 版



1. 調査区全景東から



2. 調査区全景



3. ST01古墳東から



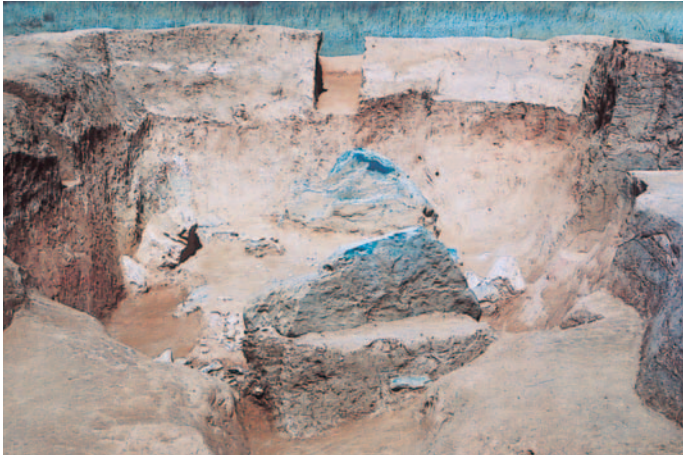
4. ST01古墳全景



5. ST02古墳南から



6. ST02古墳全景



1. ST01古墳石室南から



2. ST01古墳石室西から



3. ST01古墳石室北から



4. ST01古墳土層断面



5. ST01古墳墳丘出土状況



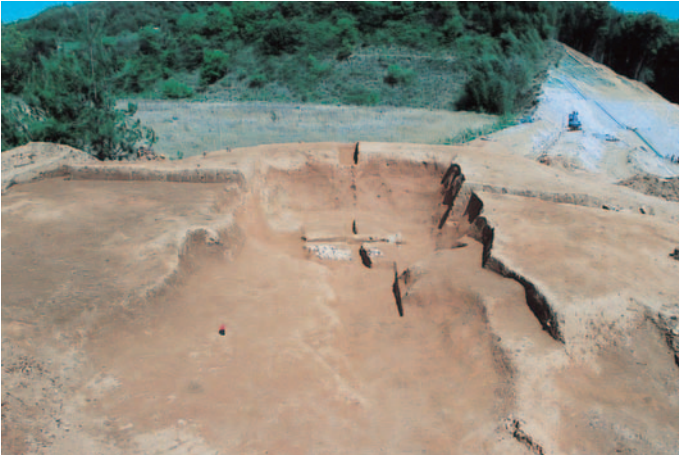
6. ST01古墳出土状況



7. ST01古墳出土状況



8. ST01古墳出土状況



1. ST01古墳墳丘除去後



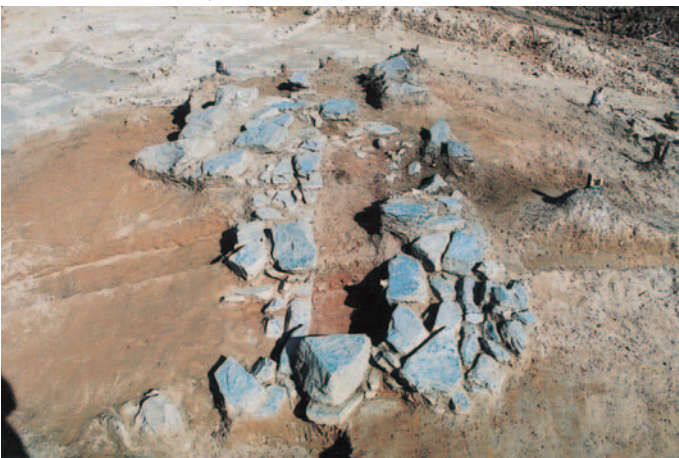
2. ST02古墳作業状況



3. ST02古墳調査前南から



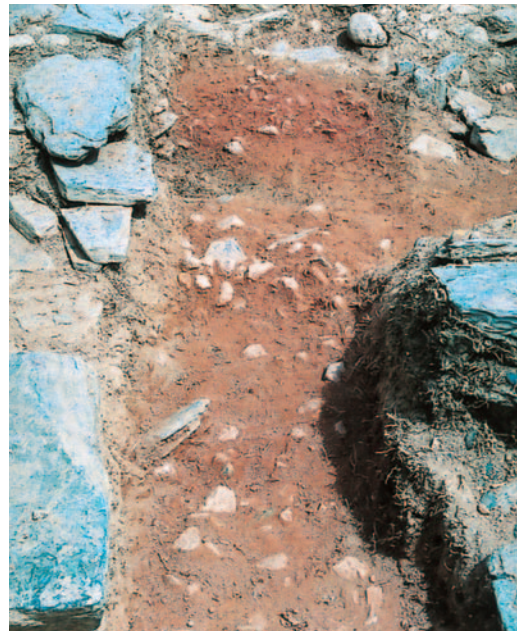
4. ST02古墳調査前西から



5. ST02古墳石室西から



6. ST02古墳石室北から



7. ST02古墳石室

写真図版 4



1. ST02古墳石室床面付近



2. ST02古墳石材除去後西から



3. SD03溝東から



4. SD03溝出土状況

出土遺物



1



2



4



3



写真図版 6



鳥栖市文化財調査報告書第69集

所熊山古墳群

埋蔵文化財調査報告書

平成15年 3 月31日 印刷

平成15年 3 月31日 発行

編集 鳥栖市教育委員会
発行 佐賀県鳥栖市宿町1118番地

印刷 大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市天神一丁目 1 番32号